

高齢者学習の予備的研究

山本 圭郎*・入江 和夫

A Preliminary Study on Leanings about the Elderly

YAMAMOTO Yoshiro* and IRIE Kazuo

(Received July 20, 2007)

キーワード： 高校家庭科、学習意欲、否定的高齢者観

はじめに

日本は超高齢社会(4人に1人が65歳以上)に突入しようとしている。そういう中で、最近、NHKはクローズアップ現代「相次ぐ介護心中・殺人事件」を放映¹⁾した。介護する子どもが親を殺めてしまう事例である。それ以前に武田²⁾は同様の事例を調査研究し、要因として、家長としての責任感、介護する男性の家事や介護知識・技術の不慣れさ、一人きりでの介護、血縁のみによる介護などが問題であると指摘している。一般に高齢者は“病んでいる”、“孤立している”、“知能が劣っている”など否定的なイメージが持たれている。正高³⁾は「周囲の否定的な高齢者観が高齢者を感化し、老いさせていく」と述べ、また、武田も「高齢者自身が、心身を病んで人の手を借りなければ生きられないなら、もうおしまいだと考えるのは周囲の高齢者による価値観がそうさせているからだ」と述べている。このように否定的高齢者観も大きな問題である。

さて、これらの問題は高齢者に関わる学習(以降、高齢者学習とする)によって解決できると考えられる。その基盤には学習の意欲や充実感が必要である。そこで大学生に高校までの、また今後の高齢者学習について考えてもらい、彼らの学習意欲、学習充実感、否定的高齢者観などについて調査を行った。ここではこれら三者間の関わりや影響を与える項目などを明らかにすることで今後の高齢者学習について一考することにした。具体的には、設定した質問項目が「高齢者学習意欲」、「高齢者学習充実感」、「否定的高齢者観」のカテゴリーに分類できるかを確かめるために検証的因子分析を行った。クラスタ分析によって学生を分類し、高齢者問題に関する意識の違いを明らかにした。また、3つの因子への影響を把握するため交互作用を調べ、単純主効果の検定を行った。さらに、「高齢者学習意欲」と「否定的高齢者観」をもたらず要因を重回帰分析によって明らかにしたので、これらの結果を順次、述べていく。

*山口大学大学院教育学研究科

1. 結果と考察

(1) 質問項目のカテゴリー化

1) 因子分析

「高齢者学習意欲」として、“学校で高齢者に関する学習内容をもっと多く取り入れるべきだと思う程度”、“日常生活での高齢者との交流を増やした方が良いと思う程度”、“学校教育において具体的介護体験・介護の現実を知る必要性の程度”、“高齢者問題を理解しようとする程度”、“小中高一貫して、高齢者問題に関する学習をする必要性の程度”、“各教科、道徳に比べて高齢者問題に関する学習の重要性の程度”、“介護等体験実習を高校までの学校教育で行う必要性の程度”の項目を設定した。「高齢者学習充実感」として、“小学校家庭科で高齢者のことを考えた程度”、“中学校家庭科で高齢者のことを考えた程度”、高等学校家庭科で高齢者のことを考えた程度”、“学校教育の中で十分に高齢者について学習した機会がある程度”の項目を設定した。「否定的高齢者観」として、“高齢者とは家庭よりも施設にいると思う程度”「高齢者はぼけていると思う程度」「高齢者は団らんする家族に含まれないと思う程度」「大部分の高齢者は社会的に孤立していると思う程度」を設定し、主因子法による因子分析を行い、バリマックス回転後の因子行列と各因子の下位尺度の信頼性 α 係数を表1に示した。

表1 高齢者学習の質問項目に関する因子行列と α 係数

	I*	II**	III***
11: 学校で高齢者に関する学習をもっと多く取り入れるべきだとあなたが思う程度は	0.76	0.07	0.02
12: 日常生活での高齢者との交流を増やした方が良いとあなたが思う程度は	0.73	0.13	0.05
10: 学校教育において具体的介護体験・介護の現実を知る必要があるとあなたが思う程度は	0.67	-0.04	-0.10
6: 小・中・高一貫して、高齢者問題に関する学習をするあなたが思う程度は	0.64	0.25	-0.01
9: 高齢者問題を理解しようとするあなたの意欲の程度は	0.63	0.12	0.12
7: あなたは各教科、道徳に比べて高齢者問題に関する学習はどの程度重要だと思いますか	0.60	0.16	0.13
8: 介護体験実習を高校までの学校教育の中で行う必要性の程度は	0.53	0.22	-0.09
14: あなたが受けてきた中学校の家庭科で高齢者のことを考えた程度は	0.12	0.87	0.03
13: あなたが受けてきた小学校の家庭科で高齢者のことを考えた程度は	0.07	0.74	0.01
15: あなたが受けてきた高校の家庭科で高齢者のことを考えた程度は	0.27	0.63	0.01
16: あなたは今までの学校教育で十分に高齢者について学習する機会がありましたか	0.12	0.53	0.06
17: 高齢者とは、家庭よりも施設にいるとあなたが思う程度は	-0.01	0.00	0.67
18: 高齢者とは、ぼけているとあなたが思う程度は	0.05	-0.05	0.65
20: 高齢者とは、団らんする家族に含まれないとあなたが思う程度は	0.25	0.10	0.49
19: 大部分の高齢者は社会的に孤立していると思あなたが思う程度は	-0.12	0.06	0.41

* α 係数 * α =0.84 ** α =0.79 *** α =0.62

回転後の第1因子(I)は全15項目の全分散の21.27%、第2因子(II)は14.46%、第3因子(III)は8.88%であり、3因子の累積寄与率は44.60%であった。各因子として設定した下位項目の内的整合性について α 係数を算出したところ第1因子「高齢者学習意欲」0.84、第2因子「高齢者学習充実感」0.79、第3因子「否定的高齢者観」0.62となり、十分信頼できる値であった。設定した下位項目は第1～第3因子として括ってよいことが明らかとなった。

2) 因子間の相関関係

また、各因子間の相関関係について調べ、表2に結果を示した。

表 2 各因子間の相関関係

相関係数

		因子 1 (高齢者学習意欲平均)	因子 2 (高齢者学習の充実感平均)	因子 3 (否定的高齢者観平均)
因子 1 (高齢者学習意欲平均)	Pearson の相関係数 有意識率 (両側) N	1 206	.330** .000 205	-.077 .270 205
因子 2 (高齢者学習の充実感平均)	Pearson の相関係数 有意識率 (両側) N	.330** .000 205	1 205	-.071 .313 204
因子 3 (否定的高齢者観平均)	Pearson の相関係数 有意識率 (両側) N	-.077 .270 205	-.071 .313 204	1 208

**、相関係数は 1%水準で有意 (両側) です。

その結果「高齢者学習意欲」「高齢者学習充実感」についてのみ中程度の正の相関 ($r=0.33, p<0.01$) が見られ、これらと「否定的高齢者観」との間に相関は見られなかった。おそらく、高齢者学習で「否定的高齢者観」に関する内容を取り上げることが少なかったのではないかと考えられる。

(2) クラスタリング

では、学生は「高齢者学習意欲」「高齢者学習充実感」「否定的高齢者観」に関して、どのような考えを持っているのだろうか、似たもの同士をクラスタリング (グループ分け) することにした。また各クラスタの特徴を把握するため、各因子得点を変数として、「大規模ファイルのクラスタ」分析をクラスタ数=3として行い、その結果を表3に示した。

表 3 各クラスタの多重比較

Tukey HSD

従属変数	(I)大規模クラスタ	(J) 大規模クラスタ	平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率	95%信頼区間	
						下限	上限
高齢者学習意欲 (因子得点)	1	2	.56478050 *	.14588913	.000	.2203060	.9092550
		3	-.70867410 *	.12556137	.000	-.10051505	-.4121977
		2	.56478050 *	.14588913	.000	-.9092550	-.2203060
	2	3	-1.273455 *	.15119591	.000	-1.6304595	-.9164497
		1	.70867410 *	.12556137	.000	-.4121977	1.0051505
		2	1.27345460 *	.15119511	.000	.9164497	1.6304595
高齢者学習充実感 (因子得点)	1	2	.92098595 *	.13417846	.000	.6041628	1.2378091
		3	-.61912758 *	.11548243	.000	-.8918055	-.3464496
		2	-.92098595 *	.13417846	.000	-1.2378091	-.6041628
	2	3	-1.540114 *	.13905926	.000	-1.08684613	-.12117658
		1	.61912758 *	.11548243	.000	.3464496	.8918055
		2	1.54011353 *	.13905926	.000	1.2117658	1.8684613
否定的高齢者観 (因子得点)	1	2	-1.261405 *	.11377695	.000	-1.5300561	-.1500561
		3	-1.005902 *	.09792361	.000	-1.2371201	-.12371201
		2	1.26140510 *	.11377695	.000	.9927541	1.5300561
	2	3	.25550293 *	.11791564	.079	-1.229204	.539262
		1	1.00590217 *	.09792361	.000	.7746842	1.2371201
		3	-1.25550293 *	.11791564	.079	-1.539262	.0229204

*. 平均の差は .05 で有意

1: 第1クラスタ=88人 2: 第2クラスタ=44人 3: 第3クラスタ=72人

第1クラスタは88名 (男子42名、女子46名)、第2クラスタは44名 (男子28名、女子16名)、第3クラスタは72名 (男子26名、女子46名)としてグループ分けできた。第1因子「高齢者学習意欲」及び第2因子「高齢者学習充実感」の得点は第3クラスタ>

第1クラス>第2クラス>第3クラスの順であり、第3因子「否定的高齢者観」の得点では第2クラス=第3クラス>第1クラスの順であった。これらの結果を図1～3に示し、各クラスの特徴を示すことにした。

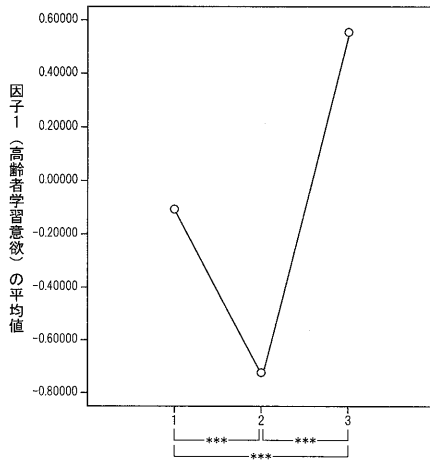


図1 第1因子と各クラス

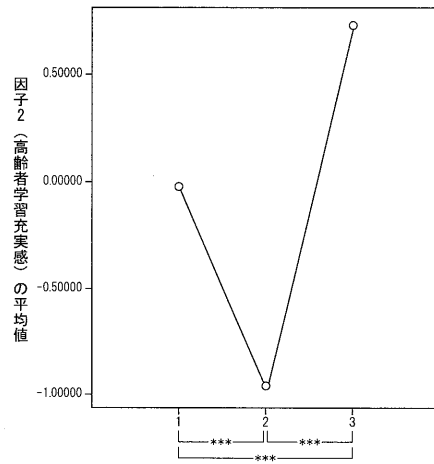


図2 第2因子と各クラス

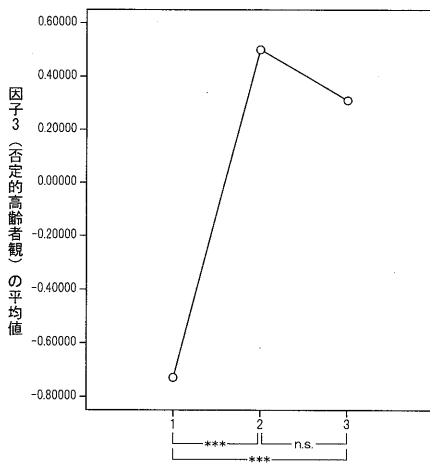


図3 第3因子と各クラス

クラス3は「高齢者学習意欲」「高齢者学習充実感」が高く、しかし「否定的高齢者観」も高い傾向にあった。クラス1は「高齢者学習意欲」「高齢者学習充実感」がほぼ平均値であるが、「否定的高齢者観」が最も低い傾向にあった。クラス2は「高齢者学習意欲」「高齢者学習充実感」が低く、しかも「否定的高齢者観」が高い傾向にあった。換言すれば、クラス3とは非常に高い学習意欲、学習充実感を持っているが、高齢者を否定的に考える集団である。クラス1とは平均的な学習意欲や学習充実感を持っているが、高齢者を否定的にはとらえない集団である。クラス2とは学習意欲や学習充実感が最も低く、しかも高齢者を否定的にとらえる集団である。

(3) 高齢者問題と各クラス

高齢者問題として“高齢者のイメージの良さ”、“介護は家庭問題だと考える程度”、“介護は社会問題だと考える程度”、“高齢者問題の理解度”、“高齢者は夜中に心配事や悩み事で眠れないこと”を設定し、上述した各クラスに意識の違いがあるかを分散分析によって調べ、表4に示した。

表4 クラスタ別高齢者問題意識 (多重比較)

Tukey HSD

従属変数	(I)大規模 クラスタ	平均値	(J)大規模 クラスタ	平均値の差 (I-J)	有意率	F 値
高齢者のイメージの良さについて	1	2.70	2	0.39*	0.00	9.01
			3	-0.14	0.36	
	2	2.32	1	-0.39*	0.00	
			3	-0.53*	0.00	
介護は家庭問題である。	1	2.55	2	-0.02	0.98	3.45
			3	-0.29*	0.04	
	2	2.57	1	0.02	0.04	
			3	-0.27	0.14	
介護は社会問題である。	1	3.01	2	0.06	0.90	4.13
			3	-0.28*	0.04	
	2	2.95	1	-0.06	0.04	
			3	-0.34*	0.04	
高齢者についての理解度	1	2.38	2	0.10	0.66	3.79
			3	-0.21	0.36	
	2	2.27	1	-0.10	0.00	
			3	-0.31*	0.03	
高齢者は夜中に心配事や悩み事で 眠れないことがありますか ☆点数が高いほど眠れないことはない	1	2.83	2	0.17	0.58	2.97
			3	0.35*	0.04	
	2	2.66	1	-0.17	0.58	
			3	0.19	0.53	
3	2.47	1	-0.35*	0.04		
		2	-0.19	0.53		

*. 平均の差は .05 で有意

クラスタ3は“高齢者のイメージの良さ”、“介護は家庭問題と考える程度”、“介護は社会問題と考える程度”、“高齢者問題の理解度”の平均値が最も高く、クラスタ2はこれらが最も低かった。すなわちクラスタ3はこれらを積極的に考えているが、クラスタ2は消極的に考えていることがわかった。上述したようにクラスタ1とは高齢者を否定的にはとらえていないことが特徴である。表中の中に“高齢者は夜中に心配事や悩み事で眠れないこと”に注目すると、クラスタ3に比べ高齢者を否定的にとらえていない傾向が有意である。すなわち、クラスタ1は高齢者を心配事などで眠れないような病的な存在とは考えていない。

(4) 各因子と影響項目

第1因子「高齢者学習意欲」、第2因子「高齢者学習充実感」、第3因子「否定的高齢者観」の各得点がどのような項目で影響しているのかを把握するために、交互作用を調べることにした。

1) 「高齢者学習意欲」

i) 項目：「介護は家族が看て当たり前」「男女」

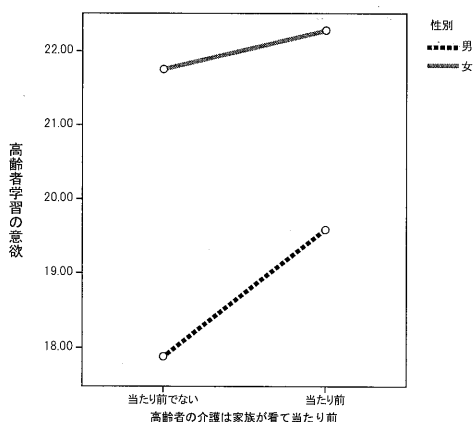


図4 第1因子への影響 (性別 × 高齢者の介護は家族が看て当たり前)

「高齢者学習意欲」の因子得点(合計)について「介護は家族が看て当たり前」と「男女」の影響について交互作用を調べた結果を図4に示した。「当たり前でない」群 ($F(1, 200)=26.58, p<0.001$)、「当たり前」群 ($F(1, 200)=11.07, p<0.01$)、「男」群 ($F(1, 200)=6.74, p<0.05$)であった。このことから、この学習意欲は「介護は家族が看て当たり前」かどうかに関わらず、女子ほど高く、男子では「介護は家族が看て当たり前」と意識している集団ほど「高齢者学習意欲」が高いことがわかった。

ii) 「介護は家族が看て当たり前」「高齢者のイメージの良さ」

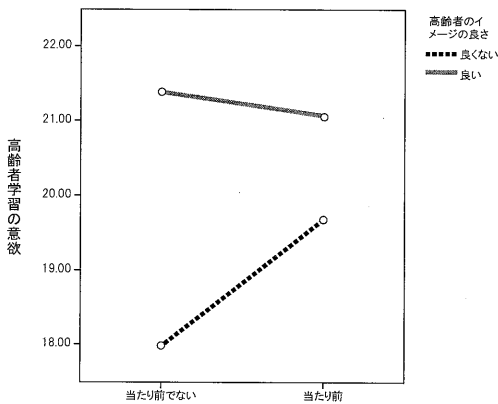


図5 第1因子への影響 (高齢者のイメージの良さ × 高齢者の介護は家族が看て当たり前)

「高齢者学習意欲」の因子得点(合計)について「介護は家族が看て当たり前」と「高齢者のイメージの良さ」の影響について調べた結果を図5に示した。「当たり前でない」群 ($F(1, 200)=18.94, p<0.001$)、「当たり前」群 ($F(1, 200)=4.75, p<0.05$)、「良くない」群 ($F(1, 200)=24.87, p<0.05$)であった。このことから、「介護は家族が看て当たり前」か、当たり前でないに関わらず、高齢者のイメージを良いと考えている集団ほど、学習意欲が高く、高齢者を良くないイメージで捉えている集団にとっては「介護は家族が看て当たり前」と意識している集団ほど学習意欲が高かった。

iii) 「介護は家族が看て当たり前」「高齢者観への親や祖父母からの影響」

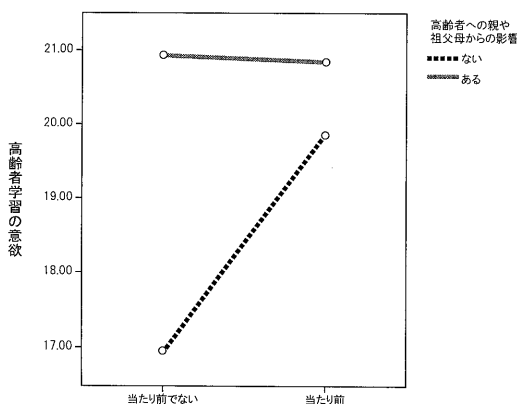


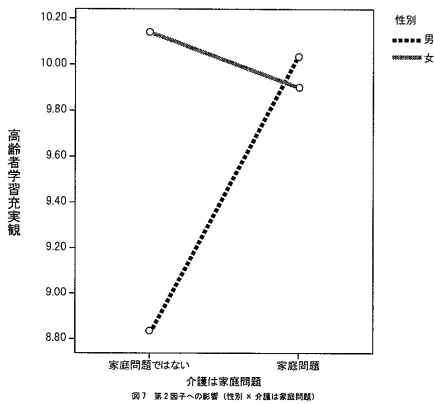
図6 第1因子への影響 (高齢者観への親や祖父母からの影響 × 高齢者の介護は家族が看て当たり前)

「高齢者学習意欲」の因子得点(合計)について「介護は家族が看て当たり前」と「高齢者観への親や祖父母からの影響」について調べた結果を図6に示した。「当たり前でない」群 ($F(1, 200)=18.18, p<0.001$)、「影響がない」群 ($F(1, 200)=6.21, p<0.05$)、であった。このことから、「高齢者学習意欲」は「介護は家族が看て当たり前ではない」と考えている集団で、なおかつ「高齢者観への親や祖父母からの影響がある」と考えている集団に高い傾向が見られた。また、「高齢者観への親や祖父母からの影響がない」と考えている集団で、なおかつ「介護は家族が看て当たり前である」と考える

集団ほど高い。

2) 「高齢者学習充実感」

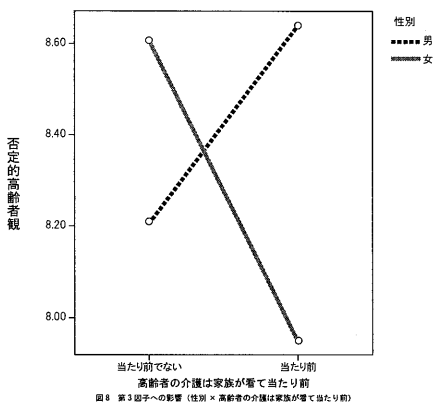
i) 「男女」「介護は家庭問題」



「高齢者学習充実感」の因子得点(合計)について「男女」と「介護は家庭問題」について調べた結果を図7に示した。「家庭問題でない」群 ($F(1, 201)=6.57, p<0.05$)、「男」群 ($F(1, 201)=6.65, p<0.05$) であった。このことから、「介護は家庭問題ではない」と考える集団で、なおかつ「女子」の方が高齢者学習充実感に高い傾向にあった。また、「男子」で「介護は家庭問題」と考えるほうが「高齢者学習充実感」が高い傾向が見られた。また、「男子」で、なおかつ「介護は家庭問題」と考える集団ほど「高齢者学習充実感」が高い傾向が見られた。

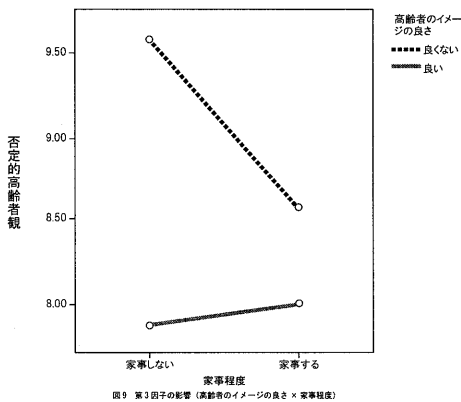
3) 「否定的高齢者観」

i) 「介護は家族が看て当たり前」「男女」



「当たり前」群 ($F(1, 203)=5.23, p<0.05$) であった。このことから、「介護は家族が看て当たり前と考える」集団で、なおかつ「女子」は否定的高齢者観が低い傾向が見られた。

ii) 「高齢者イメージ」「家事」



「家事をしない」群 ($F(1, 204)=15.58, p<0.001$)、「良くない」群 ($F(1, 204)=6.01, p<0.05$) であった。このことから、「家事をしない」集団で、なおかつ「高齢者イメージが良い」と考える集団は否定的高齢者観が低い傾向にあった。また、「高齢者イメージが良くないと考える」集団で、なおかつ「家事をする」集団は否定的高齢者観が低い傾向にあった。

(5) 各因子の因果関係

1) 「高齢者学習意欲」

「高齢者学習意欲」に影響を与える項目との因果関係を明らかにするため、「性別」「高齢者との別居程度」「高齢者介護の未経験度」との相関関係を調べ、次いで重回帰分析を行った。これらの結果を表5、6に示した。

表5 「高齢者学習意欲」と影響要因との相関関係

		相関係数			
		性別	q2: 実家で高齢者と一緒に住んでいますか	q4: 高齢者を実際に実家で介護したことがありますか	因子1 (高齢者学習意欲平均)
性別	Pearsonの相関係数 有意識率(両側) N	1 209	-0.52 .451 209	-0.25 .716 209	.378** .000 206
q2: 実家で高齢者と一緒に住んでいますか	Pearsonの相関係数 有意識率(両側) N	-0.52 .451 209	1 209	.211** .002 209	.201** .004 206
q4: 高齢者を実際に実家で介護したことがありますか	Pearsonの相関係数 有意識率(両側) N	-0.25 .716 205	.211** .002 209	1 209	-.186** .008 206
因子1 (高齢者学習意欲平均)	Pearsonの相関係数 有意識率(両側) N	.378** .000 206	-.201** .004 206	-.186** .008 206	1 206

** 相関関数は1%水準で有意(両側)です。

「高齢者学習意欲」に関して、「性別」の女性(男=1, 女=2なので)に中程度の正の相関($r=0.378, p<0.01$)があり、「高齢者との別居程度」とでは弱い負の相関($r=-0.201, p<0.01$)があり、また「介護の未経験度」とでは弱い負の相関($r=-0.186, p<0.01$)があった。このことから重回帰分析を行った。その結果、「女子」では $\beta = 0.366, p<0.001$ 、「高齢者との別居程度」では $\beta = -0.149, p<0.05$ 、「高齢者介護の未経験度」 $\beta = -0.143, p<0.05$ であり、これらが要因となって、高齢者学習意欲を高めることがわかった。換言すれば、高齢者との同居があること、介護経験があることが高齢者学習意欲を喚起する要因となっている。

(2) 「否定的高齢者観」

「否定的高齢者観」に与える項目との因果関係を明らかにするために、「性別」「高齢者との別居程度」「高齢者介護の未経験度」との相関関係を調べ、次いで重回帰分析を行った。これらの結果を表6に示した。

表6 「否定的高齢観」と影響要因との相関関係

相関係数

		性別	q2: 実家で高齢者と一緒に住んでいますか	q4: 高齢者を実際に実家で介護したことがありますか	因子1 (高齢者学習意欲平均)
性別	Pearsonの相関係数 有意識率 (両側) N	1 .451 209	-.052 .451 209	-.025 .716 209	-.0.89 .201 208
q2: 実家で高齢者と一緒に住んでいますか	Pearsonの相関係数 有意識率 (両側) N	-.052 .451 209	1 .002 209	.211** .002 209	.015 .826 208
q4: 高齢者を実際に実家で介護したことがありますか	Pearsonの相関係数 有意識率 (両側) N	-.025 .716 209	.211** .002 209	1 .014 209	-.171* .014 208
因子3 (否定的高齢者観平均)	Pearsonの相関係数 有意識率 (両側) N	-.0.89 .201 208	.015 .826 208	-.171* .014 208	1 208

** 相関係数は1%水準で有意 (両側) です。

* 相関係数は5%水準で有意 (両側) です。

「否定的高齢者観」に関して、「性別」、「高齢者との別居程度」とでは相関がなく、「介護未経験度」には弱い負の相関 ($r=-0.171, p<0.05$) があった。重回帰分析を行った。結果、「高齢者介護の未経験度」 $\beta = -0.184, p<0.05$ であり、これが要因となって、「否定的高齢者観」を低める影響があることがわかった。換言すると、介護経験があるほど高齢者を否定的にとらえる傾向があることが明らかとなった。

2. おわりに

以上の述べてきたことは次のようにまとめられる。

1) 3因子「高齢者学習意欲」「高齢者学習充実感」「否定的高齢者観」に設定した下位項目の検証的因子分析を行った結果、累積寄与率は44.60%であり、下位項目は内的整合性から3因子の中にも入れることができた。

2) クラスタ分析により、学生を3つの集団に分類した。クラスタ3は学習意欲、学習充実感、否定的高齢者観のいずれもが高い集団であり、クラスタ2は前2者が消極的であり、残りは同様であった。クラスタ1は前3者の否定的高齢者観を最も消極的に考える集団であった。

3) 高齢者問題の内訳“高齢者のイメージの良さ”、“介護は家族問題と考える程度”、“高齢者問題の理解度”、“高齢者は夜中に心配事や悩み事で眠れない程度”について、各クラスタの意識を明らかにした。クラスタ3は全項目を積極的に考え、クラスタ2は前3者までを消極的に前4者を積極的に考えていた。クラスタ1は前4者である否定的高齢者観を最も消極的に考えていた。

4) 交互作用

i) 「高齢者学習意欲」について、女子ほど高く、男子では「介護は家族が見て当たり前」と意識している集団ほど高いことがわかった。また、性別によらず「高齢者のイメージが良い」と考えている集団ほど高かった。

ii) 「高齢者学習充実感」について、「介護は家庭問題ではない」と考える集団で「女子」

のほうが高く、また、「男子」で「介護は家庭問題」と考えるほうが高い傾向にあることがわかった。

iii) 「否定的高齢者観」について、女子で「介護は家族が見て当たり前」と考える集団で低いことがわかった。「高齢者イメージが良くない」集団で「家事をする」集団は低い傾向にあることがわかった。

5) 重回帰分析

i) 「高齢者学習意欲」喚起は高齢者との同居、介護経験有りが要因となっていた。

ii) 「否定的高齢者観」の高い傾向は介護経験有りが要因となっていた。

介護殺人をしてしまうのは男子が多い。そこで「高齢者学習意欲」「高齢者学習充実感」が高い男子に注目する。前者では「介護は家族が見て当たり前」と考える集団、後者では「介護は家庭問題ではある」と考える集団である。これらは“介護とは避けては通れない問題”と意識する男子として言い換えることができる。また、男女に関わらず“高齢者との同居”や“介護経験”が「高齢者学習意欲」を喚起することから、今後の高齢者学習では上述した意識を育てるとともに高齢者との触れ合いが重要である。

しかし、「高齢者学習意欲」「高齢者学習充実感」が高くても「否定的高齢者観」の高い集団は存在する。“病んでいる”、“孤立している”、“知能が劣っている”などの否定的高齢者観は高齢者をそのように感化させてしまうおそれがある。「家事をする」(男女共通)は否定的高齢者観を低める効果があった。家事とはそれを果たすことで責任感を育む。手伝いとしての家事でなく、自分の仕事として意識化させることが今後の高齢者学習に必要である。

さて、「介護経験有り」は学習意欲を喚起させる効果があるにもかかわらず、否定的高齢者観を高めてしまう。確かに介護経験があれば、高齢者の体と心の衰えを目の当たりにすることになり、高齢者を“ぼけてしまっている”、“困らざる家族にはふくまれない”、“施設にいる”などと考えてしまいがちであろう。ここで後二者の高齢者とは自分の家族でなく、姥捨て山行き存在として見なしている感がある。“役立たないものは捨てる”という意識が垣間見える。介護される高齢者は機械や物ではなく、人間である。たとえ認知症であっても一緒に食事を囲みたい。「介護経験あり」が否定的高齢者観を生んでいるのは、“家族”、“親子の絆”など家族関係に関する学習が不十分だったからではないだろうか。今後、「介護経験有り」によって否定的高齢者観が低下するような家庭科の内容を検討するべきである。

参考文献

- 1) NHK クローズアップ現代「「防げなかった悲劇～相次ぐ介護心中・殺人事件～」
2006年06月29日(木)放映
- 2) 武田京子 「老女はなぜ家族に殺されるか」 ミネルバ書房 (1994)
- 3) 正高信男 「老いはこうしてつくられる—こころとからだの加齢変化—」 中公新書
No. 1518 (2005)